

【真っ直ぐな釣川が教えてくれた事】

福岡県

宗像市立自由ヶ丘中学校

九年

伊賀崎

望

雨の日は嫌いだ。靴や制服が濡れるし、せつかくセットした髪も学校に着いた時には台無しになっている。何よりどんよりとした空や空気が気分までじめじめどんよりとした物にしてしまう。雨の日の朝は兄妹して憂鬱な気分です学校へ行く準備をするが、母だけが

「今日は恵みの雨の日だね。」

と言う。いつだったか母に聞くと、母の勤めているキリスト教系の幼稚園ではお祈りの時間があり、雨の日には

「恵みの雨をありがとうございます。」

と雨が降ってきた事に感謝するそうだ。お祈りが上手な子は、木や草、かたつむりが喜びますように、とか、鳥や蝶々がお家でゆつくり過ごせませすようにとかお祈りしてくれるからとても素敵でかわいいのよ、と母は言う。確かにそれは素敵な話だけど、私にはデメリットの方が多い。なかなか雨に恵みを感じる事はできなかった。しかしそんな私に水の恵み、自然の力について考えさせてくれる出来事があった。

少し前に、私は釣川の改修工事を江戸時代どのようにやっていたか、という話を聞く機会があった。釣川は宗像市に流れる二級河川で穏やかに真っ直ぐに流れ、玄界灘に続いている。私は一直線な釣川しか見た事がないが一七〇〇年代までは、玄界灘に繋がる下流付近は今より大きく右にカーブし、もつと東に曲がっていたそうだ。それを当時の宗像郡の人々はたくさんの人の力と時間をかけて真っ直ぐにする改修工事をしたのだ。曲がっている川などたくさんあるのになぜそんな大変な工事をわざわざしたのだろうと疑問に思った。一つ目の大きな理由は水害を防ぐ事だった。大雨で川が氾濫する度にカーブの内側にある江口村が被害に遭っていたそうだ。川が真っ直ぐに流れる事で、村が水害に遭う事がなくなった。二つ目に今まで大雨の度に水害

に見舞われていた土地が安定して使えるようになり、農耕地として利用出来るようになった。田畑での収穫が増え、人々の暮らしも改修工事前より豊かになったそうだ。そして三つ目は水運のため。物を運ぶ手段として使われていた船がとても通りやすくなった。釣川の工事は大きな改修工事ではなかった、と講師の方は話していたが、それでも江戸時代に人の力のみで十キロメートルもの川の流れを変えるのはさぞ大変な事だったと思う。しかしそうしなければいけない、水害を被る江口村の人々のため、そして改修工事を行う事で受けられる釣川の恩恵は当時の宗像郡の人々の生活を大きく良いものに変えた。それを江戸時代の人々は知っていたのだろう。大雨が降っても、釣川が氾濫した所を幸い見た事はない。江戸当時から、現代でも度々行われている釣川の工事のお陰だと思う。

水はなくてはならないのだが、時に人に牙をむく事もある。その被害は人の命や生活をも脅かす事だ。しかしそこに人々が知恵と工夫を出し、手を加える事で人の命や生活をしっかりと守ってくれる最強の味方にもなってくれるのだ。春休みに宗像大社にでかけた際、穏やかに流れる釣川の川沿いには菜の花が咲き誇り、釣川の道路を挟んだ向かい側には、青々とした田畑が一面に広がっていた。宗像大社に行くまでのこの一直線の道が、道の両脇に広がるのどかな風景が私は大好きだ。何となくその時に江戸時代の方々への感謝の念が私の中で沸き起こった。そして同時になぜか母の幼稚園の「恵みの雨」のお祈りの話を思い出した。私達の何気ない日常生活は水と水の育む自然と、それをより良い形で恩恵にあずかるうとする人の工夫と力で成り立っている。考えると奇跡のような事を私達は当たり前のように享受している。雨の日はまだ好きになれそうにないが、水が味方でいてくれる事の感謝を忘れずにいたい。